

平成二十六年十二月十四日 予餞会記念講演

「異文化としての日韓を考える」

拓殖大学教授 吳 善花 先生

皆さん、こんにちは（塾生「こんにちは」と返事）。和敬塾の卒業生の皆さん、本日はおめでとうございます。和敬塾では以前もお話をさせていただきましたが、本日もお話しできることを大変光栄に思っております。

本日は日本にとつてとても大切な日ですね。日本の将来を担う国政選挙の投票日でございます（平成二十六年十二月十四日第四十七回衆議院議員総選挙）。偶然この日と重なったことは何か運命的なこと、とてもうれしく思っております。

今日はとてもすばらしいお天気ですね。以前も思ったのですが、今日この敷地の中に入つて、ここは本当に都会の真ん中なのかと思えました。まるで山の奥であるかのように、とても森が深く、しかも紅葉が残っている。こんな場所が東京にあるなんて、と改めて感じながらここにまいりました。

大好きな言葉があります。場所の力、「場力（ばりよく）」という言葉です。どんな場所に自分の身をおくかによって、同じ人間であっても人生が変わってくるということを、自分の体験からも感じております。このようなすばらしい場所、しかも志の高い和敬塾で数年間生活して、様々な出会いをし、様々な人と触れあい、勉強できた皆さんは、とても運がよい人たちだと私は思います。

数多くの選択肢があります。小さなアパートを借りて大学に通うとか、大学の寮に住んでそこから通うとか、いろいろあります。しかし、都会という場所の刺激と自然の美しさが共存しているこの場所で、すばらしいイベントなどに参加しながら生活すること。自分の意思であろうと、ご両親の意思であろうと、いずれにしても自分がこの中で生活して勉強し、様々な人とつきあえたことは、皆さんにとつて人生最大の

幸運だったのではないかと思います。今日、日本がこれからどんな国になっていくのかという選挙の日に、皆さんが和敬塾を卒業されて新しい出発をし、私が皆さんとお会いできたことを、とても感謝しております。

私は来日してかなり長いです。留学生として、日本の大学生活をスタートしました。もちろん韓国人ですから、文化の違いなどで理解できないことがたくさんありました。同じ人間なのにこんなにも違うのかと、大学生のときからずいぶん悩みました。「日本人はおかしい」と思ったこともありましたが、私はまさに異文化ということを経験していたんですね。しかし、様々なプロセスを経て「なぜ日本人と韓国人は考え方や価値観がこんなに違うのか」「違う点が多いから、日韓問題はうまくいくときとないときがある」と強く感じるようになりました。「私の悩みは個人の悩みを超え

て国と国の関係の問題でもある」と思い、本を出版することにしたんです。

当時の私の肩書きは「留学生」でした。「比較文化論を書きたい」と出版社に申し込みましたら、「あなたは留学生の立場だし、名前も売れていない。そんな人が『比較文化論』なんてタイトルをつけたところで誰も買わない。もう少し刺激的なタイトルをつけて、最初は何かドキュメンタリー的なものを書いたほうがよいのではないでしょうか」といわれました。

確かにそうなんです。一人の名もなき留学生が本を出そうとしても、世の中そんなに甘くないですね。それで「おまかせします」といって、出版社にタイトルなどを決めてもらいました。「日韓はこんなに違う」「こんなところに問題が起きている」ということを本質的なところから探っていきたくてという気持ちで、原稿を書き進めました。内心「この本を書けば、まちがいに売れるにちがいない」と思いながら。一人の名もなき留学生が、「日韓はこんなに違う」「こんなに問題が起きている」「どうしたらいいのか」「私なりの提案がある」といって本を出すんです。私が「この本はまちがいにベストセラーになりますよ」と言ったら、出版社の方はどう思

うでしょうか。無視するでしょうか。どう思います？（塾生「いや、変わった人だなあと」）「変わった人だなあ」と。この本、出版してくれませんか。（塾生「しないと

思います」）しないと思うでしょう。そうしたら、どういうふうに出社に売りこんだらよいでしょうか。私の立場で考えてみてください。名もなき韓国の留学生ですよ。（塾生「自分の金で出版する」）留学生はお金などありはしないでしょう。私の大学は国立でしたが、授業料の三十万のお金もなくて、友達に借りたりしていたんです。出版にあてるお金などないんです。自費で出した場合、一冊に数百万かかるんですね。（塾生「有名な人に考えを売りこむ」）ありがとうございます。では、他の方、もしあなたが自分の考えを本にしたら売れるにちがいないと思って、原稿を持って出版社に行った。けれども、出版社はたくさん原稿が入ってきますから、なかなか見てもらえない。売れますといくら言ってもなかなか信じてもらえません。どのように売りこんだらよいでしょうか。（塾生「ブログなどに書いて多くの人に见てもらおう」）ありがとうございます。今の時代なら、それができるんですね（会場笑）。二十年前はそんなものはなかったんです。

私も、自分で売りこんでも無理だということはおわかっていました。そこでどうしたのか。私は日本に来て、勉強会などに積極的に参加したんですね。たとえば、日本・韓国に関係のあるビジネスマン、あるいはジャーナリスト、そういった人たちの勉強会に積極的に参加することにしたんです。何年かのあいだに、私のことをよくわかっている人たちが何人もできたんですね。その人間関係を活用したんです。もちろん、日本語を教えてもらったり、韓国語を教えたりもしました。そのときに「日本と韓国

のあいだにはこんな問題がある」という話をずつとしていたので、その方たちは私を信頼してくれるようになったんです。そのルートを通して出版社に話をする。こうなれば、出版社は信用してくれるんですね。自分で「私はこんな人間ですよ」と言っても、なかなか信用してくれないわけです。こうして信用はしてもらえましたが、出版社もまさか売れるとは思っていません。最初の本を出した出版社は小さな出版社でした。従業員が四、五人しかいないところですから、宣伝するお金もないです。でも私は、出版社が大きいかどうかは関係ない、とにかく本を出してくればよいと思っていました。最初は三千部です。一万部

ぐらいからスタートしてくれればよいと思つていたんですが、三千部で、しかも宣伝をまったくしていない。わくわくしながら本屋に行くと、棚に一冊だけさしこんであるんですね。こんな本の洪水のようなところで、私の本を読んでくれる人がいるだろうかと思いました。

発売して一週間はうんともすんとも聞こえてこなかったですよ。ところが一週間後、新聞に大きく書評が載ったんですね。経済新聞でした。そこから、信じられないことが起こりました。私は「売れるにちがない」という自分の感覚を信じていましたが、その勘が当たったんですね。ものすごく売れていきました。十二月の最初に本を出してから、一ヶ月間、本の在庫がない状態が続いたんです。不況で紙がない年でした。

それからどんどん売れていきましたね。私は人生が変わりました。私は運がよいと思つていますし、いつもそう言います。でも、自慢みたいですから、皆さんは言わないでしよう。(塾生「言いません」)ある会社の社長は、最終面接で必ずこう訊くそうです。「面接は全部終わりました。お疲れ様でした」と言つて立ちあがる。そのとき、「ところで、あなたは自分で運がよい

と思いませんか」。そう訊かれたらどうしますか。自分は運がよい人だと思つていますか。(塾生「自分はあまり」会場笑)運がよいとは思わないですか。面接は全部終わりましたからね。ここからは採点されません。どうですか。自分は運がよい人だと思つてますか。(塾生「その場だったら、運がよいと答えると思つます」)

これはとても大切なことなんです。その社長は、その答えで採用を決めるそうです。そこから面接の本番なんです。運の悪い人が会社に入つてこられたら困るわけです。自分で運がよいと思う人と運が悪いと思う人では、運がよいと思う人のほうに運がついてくるそうですからね。たとえば、「運の悪い人」に投資しますか? 株とか証券とか、「運が悪い」といつている会社に投資できますか? ここがとても大切なところなんです。私は「運がよい」と口癖のようにいう人は、必ずよい運が寄つてくると聞いたことがあります。

私は安倍総理と何度もお会いしたことがあるんですが、あの方は口癖のように言つています。「私は運がよいからね」とか。だから二度目の総理大臣になれたということ。総理大臣一回目のときはダメになつたでしょう。ダメになつたときも、お会

いしたら「でも私は運がよいから、先生、何か私は変わると思つます」と。口癖のよりに言われていました。「このタイミングで二度目の総理になつたことは、私はすごく運がよいですよ。これで私は日本を変えていきます」。その言葉を自分で行うことによって自信がつくんです。私は皆さんはすごく運がよいと思つますよ。このようなすばらしい場で四年間過ごすことができ、ここが出发点になるんですから。

ここまでの話が長くなって申しわけないですが、本を書いて売れば売れるほど、私もよいことばかりではありません。その間さまざまな弾圧があるし、もういろいろすごかつたですね。もう信じられないほど叩かれましたが、しかし私は常に思つているんですよ。「どんなに叩かれようとも、私は運がよい人だから」。そう信じる気持ちですが、落ちこまない自分をつくると思つています。では、いったいどんな内容の本を書いたから売れて、韓国で叩かれることになつたのか、簡単にお話ししたいと思います。

今、日本と韓国のあいだに何が起きているんでしょうか。どうです、何が起きていますか? また質問攻撃ですが、日本、韓国、中国のあいだに何が起きていますか。

(塾生「日韓関係は前の李明博(イ・ミョンバク)政権の頃から悪くなっています。あと、中国は尖閣諸島の問題で緊張が続いています」) そうですね。今日の政局で、安倍政権は特に経済問題、アベノミクスということを主な狙いとして打ちだしているんですが、さらに大きな問題は安全保障問題と外交問題なんです。外交問題で一番複雑なところは、中国と韓国の問題、北朝鮮も含めて、です。これが日本にとって一番の悩みの種なんです。

ただの外交問題だけじゃなく、中国の尖閣問題、韓国の竹島問題などで、中国と韓国が手を組んで反日の攻撃をしてくるわけです。この問題は、国家として一番深刻な問題です。もちろん、日本の経済をよくしていくことはものすごく大切ですが、中韓との関係はいま危機状態に陥っています。戦争になるかもわからない。いま、国境問題は極めて重要な問題なんです。

しかし、この問題の本質にあるものは何でしょうか。政治の問題としては、日本はあくまで竹島と尖閣諸島は日本の領土であることを主張し続ける。韓国、中国はなんとか自分の国のものにした。このような紛争問題が、日韓、日中のあいだに起きているんですが、韓国の場合、それに加え

ととにかく日本を貶めたいという気持ちがあるのも強いんです。

それで持ちだしてくるのはどんな問題でしょうか。慰安婦問題ですよ。世界に、特にアメリカ、オーストラリアなどに行くと、慰安婦像をつくったりしながら、いかに日本の男性がいやらしい人たちなのか、女性を苦しめたのか、というイメージを世界にアピールしたくて仕方がありません。それで、行くところ行くところ、日本人の人間性を貶める攻撃をしているわけです。慰安婦はもちろん過去のことですが、現在の日本人の精神性につながっている、日本人は慰安婦や強制徴用などについて正しい歴史認識をもつべきだ、というようなことを繰り返し繰り返し言いつづけているんです。

でも、正しい歴史認識というのはいったい何なのか、ということなんです。苦しめた韓国の女性たちに賠償すべきだ、誠意ある行動を示してほしい、というようなことを言っていますが、これは極めてあやふやで、どのようにしたらよいかさっぱりわからない状態が続いております。

「正しい歴史認識」とは何なのでしょ。これは「韓国がつくった歴史認識が100%正しい」という見方から、日本人は

韓国人とまったく同じ歴史認識をもつべきだといっているんです。ところが、日本人は「歴史認識はいろいろな考え方があって、話し合いをしましょう」と。それで、日本人の考え方、韓国人の考え方の中間ぐらいの点で「お互い未来志向でいきましょう」というんですね。すると韓国は「どうして話し合いをしなきゃならないの？話し合いをする必要はない」と。「どうして歴史認識にいろいろな見方があるんですか。ありえないよ。韓国の歴史認識が100%正しいですよ」と。日本人の歴史認識は聞く必要ない、韓国の考え方に寄ってください、というのが韓国の言い分なんです。

これはちょっとワガママに聞こえますか？　すぐワガママに聞こえるはずなんです。ところが、いくら韓国人はワガママじゃないか、というようなことを言っても、言うのは簡単だけれども問題の解決にはならない。深い深い価値観の違いが、日本と韓国のあいだに潜んでいる。この価値観の違いを知って、その上で付き合いを考えていかなければいけないんですね。ただただ「日本人の考え方」「韓国人の考え方」を押しだして付き合っていけば、いかなる外交、いかなる文化交流が行われようとも、

日韓・日中関係に未来はない、というのが私の考え方です。

では、いったいどうしたらよいんでしょう。日本人と韓国人は顔がそっくりですね。中国人もそうですけれども。顔色は同じなのに確かに違うところがある。でもなぜか、違いを違いとして見ようとしません。もちろん、日本、韓国、中国のあいだの違いは、他の国に比べれば小さな違いかもしれませんが、しかし、この小さな違いの中に大きな問題が潜んでいるということを指摘しながら、このような問題がいま日韓関係を妨げている、ということをつづけているんです。その本質的なところを、今日は少しお話しさせていただきたいと思います。

これだけ韓国で反日感情が激しくなっているとなれば、日本から韓国に行く観光客がすごく減っているのは確かです。前は東京発済州島（韓国の人気の観光地で、呉先生の出身地）行きの便が毎日あったんですね。ところが、韓国で反日感情が激しくなった頃から観光客が減って、飛行機の本数が減ってしまったんですね。週五日に減りました。それでも空席が多い。それが現状です。日本人観光客が韓国に行かなくなっている。その分、韓国から日本へやって

くる観光客は——どう思いますか？ 減っている？ 増えている？（塾生「増えている」なぜ増えていると思いますか？（塾生「韓国が経済的に発展して、お金に余裕ができたからだと思います」）いま円安ということももちろんあります。あれほど反日感情を持つなら、日本に行つて何をするのでしょうか。反日運動ですかね。（塾生「学んでいる」）学生の場合は学んでいるでしょうけどもね。

一般の観光客は、数日間日本に滞在して、反日運動をするのかというところでなくて、すごく楽しんでるんですね。何を楽しくしているかというと、まず温泉に行きます。東京の近くならば箱根とか日光とか、このようなところに行つて温泉に浸かって楽しみます。日本人以外で温泉が好きなのは韓国ですね。韓国に温泉文化があるかというところではなくて、戦後韓国では日本の影響を受けて銭湯が流行りました。日本に来れば、いたるところに温泉があるし、温泉は体によいので、温泉に入ります。温泉が好きだ好きだといって温泉に入ります。

それだけではありません。日本の温泉に行くと、何があるでしょうか。温泉文化があるんですね。「おもてなし」です。「お

もてなし」、これは日本にしかないものなんです。ホスピタリティとは違うんです。「おもてなし」は食べ物だけではありません。とても親切で優しく丁寧で、みんな驚きますね。温泉に行くと女将さんがいますよね。ものすごく親切に、ものすごく丁寧で、すばらしいおもてなしを受けて、しかも和食です。これは食べ物なのか芸術作品なのか。和食は美しく見えるんですね。素材を大切にしながら、本当にきれいに飾つてあつてね。韓国人には和食は刺激がなくてもの足りなく感じるんですよ。韓国の食べ物はいいたい、辛かったりと刺激がありますからね。もの足りませんが、しかし見た目の美しい和食にはとても感動するんです。

それと、温泉に入ったあと街を歩きながら、必ず食べたがるものがあるんです。韓国人にこれを食べさせると一時的に反日感情がなくなります。何だと思いませんか。韓国から来たお客さんをまずどこに連れていけばよいでしょうか。（塾生「湯豆腐」会場笑）湯豆腐？ 湯豆腐は、韓国人は慣れるまで時間がかかりますね。これだけは知っておいて損はないです。そこから話はずみですよ。（塾生「酒まんじゅう」会場笑）酒まんじゅうね。ちよつと私もよく

わかりません(会場笑)。(塾生「ラーメン」)ラーメン。韓国ではラーメンはインスタントラーメンが定着してしまったので、貧困層が食べるものだと思われると思います。日本はどんなにえらい方でも、「シメのラーメン」といって、お酒を飲んだあとで夜中に食べにいきますが、韓国ではラーメン屋に連れていくとみんな機嫌が悪くなりますね(会場笑)。自分を粗末に扱われたと思うんです。反日感情がもっと強くなりますよ。まずラーメン屋は連れていかないほうがよいですね。これは知っておいたほうがよいです。

実は焼肉なんです(塾生から感心の声)。焼肉は韓国じゃないですか、と思われるかもしれませんが、日本の牛肉はいま世界で一番おいしいんですね。日本の牛肉の歴史は韓国よりもずっと浅いです。歴史の浅い日本が、なぜこんなにおいしいものをつくれたのか。韓国では和牛の店がとても流行っています。名前も「和牛」といっています。でも、日本からの輸入品ではありません。どんなものなのか。技術的なことは私にはわかりませんが、オーストラリアに日本人が行って、霜降り「和牛」をつくった。それで「和牛」として世界に売りだしているんですね。韓国はこれをいち早

く輸入しましたから、安く仕入れることができるんです。それで安い「和牛」を食べることができる。「いやあ、和牛ってこんなにおいしいものなのか」と思いながら韓国人は食べます。

日本で松阪牛という名前が有名なのは、情報としてみんな知っています。そうすると、和牛イコール松阪牛だと思っている人がすごく多いんですね。「日本に行つて本物の和牛を食べてみよう」ということになるんです。実は、私の親戚十人ぐらいが日本に来たとき、「何を食べたい？」と訊くと「和牛食べたい。松阪牛食べたい」と言われたんですね。これは困ったんです。私も松阪牛は一回か二回ぐらいしか食べたことがないんです。松阪牛をみんなにごちそうしたら私は破産します。でも、とにかく焼肉屋に連れていって、和牛を食べさせたんですね。「松阪牛はこんなにおいしいものか」とみんな感動していました。松阪牛ではないということと言わなかったんですね(会場笑)。黙っていました。そのあとで寿司もすき焼きも、いろいろなのを食べてもらいました。韓国人はすき焼きも好きですね。しゃぶしゃぶよりはすき焼きのほうが好きです。それで最後に再び和牛を食べさせると、しばらく親目的にな

ります。これは知っておくとよいですね。実際、韓国人は日本で楽しく過ごします。韓国には見るべきなかつた日本社会の姿には、感動するものがたくさんあるんですね。たとえば、デパートに行きますと、さまざまなお菓子があつて、デパートだけではありません。いろいろな温泉地、観光地に行きますと、おみやげがたくさんありますね。お菓子がきれいに包装されているでしょう。韓国は包装する文化がほとんどありません。何重にも包装されているのは、世界でも日本独特でしょう。中身はともかく、みんなこれで感動するわけなんです。

今、これだけ反日感情があるんですが、日本社会のことはどこか好きなんです。しかし、国家とか歴史とかを思うと、日本が許せないという気持ちになる。日本人は、韓国には反日家と親日家が別々にいるんじゃないかと思つていますが、そうではなくて、反日家と親日家は一人の人間なんです。だいたい日本を評価しているんですけども親切で優しい、社会は秩序が保たれている、あるいは高度な技術力を持っている。そういうことはすごく評価している。けれども、歴史問題、竹島問題となると、同じ人間が「もう許せない」と言いだすん

ですね。これほどに、日本に対する韓国人の気持ちというのは複雑なんです。

中国人の反日感情は、政策的に見ればわかるんです。政治家が変われば反日感情が薄れる可能性があります。しかし、韓国人の反日感情は複雑に絡みあっています。「日本のことがわからない」というところから始まって、わけのわからない、ものすごく感情的な反日的姿勢になっているんです。ですから、これは政治家が変わってもそう簡単には変わるものではない。複雑なものがあるんですね。

そこで、どんなところで困惑しているのか。日本に来て日本社会を見たとき、社会はこれだけ秩序が保たれているし、親切で思いやりがあるし、とても繊細な技術力から世界最先端の技術力まであるし、経済的にもとても豊かだし、なんといっても治安がよいです。世界的なレベルではどれぐらいでしょう。会場の二番目の列の方、どうでしょう。か。（塾生「ベストファイブぐらいには入るんじゃないでしょうか」）根拠は？（塾生「どこかで見ました」）実は人口比率的に日本が世界で一番よいです。犯罪比率が一番低いんですね。それほどの国に皆さんは住んでいるんですよ。どうですか。（塾生「留学していたことがあるので

実感があります」）どこの国に留学していたんですか？ ヨーロッパ？（塾生「オーストラリアです」）どこの国を見ても、日本ほど安全な国はないですね。日本は世界でもっとも治安のよい国なんです。皆さんはそのようなすばらしい国に生まれて、その国でいま暮らしているということなんです。皆さんはどれだけ実感されているでしょうか。

外国から来ると、異国人は本当によく実感します。これだけ安全で、女性一人で夜に出歩ける街は、世界の大きな街ではそんなにありません。でも、日本ではいくら危ないと言われる街であろうとも、女性一人で夜に出歩くことができます。たまに変な事件は起こりますが、それは特別なことで、日常的にはとても安心していられる。

しかし、この国はこれだけすばらしくて思いやりがあるのに、日本人は親切であるゆる面ですごくよいのに、日本人の精神性は何なんでしょうか。日本人の精神の軸になるものは何でしょうか。それを日本人に訊くと、なかなか答えられません。

たとえば、西洋人の場合はキリスト教化圏としての精神性がある、軸があるんですね。中国人、韓国人の場合は何でしょうか。何ととっても儒教イデオロギー、儒教的な

精神性があるんですね。「神様は信じてはいけない」ということが儒教の精神性の核にあります。徹底した世俗主義なんですね。人間の先祖以外のものを拝んではいけないんです。

そうして日本を見ると、日本人がこれだけすごい社会をつくりあげた原動力となっている軸は何なのか、ということのみならず、知らりたがりませんが、日本人に訊いてもほとんどが、うまく答えられません。外国人から訊かれたらどう答えますか。（塾生「わかりません」）いかがですか。皆さんが答えられないために、その不安が反日感情をかきたててもいるんですね。

日本のことがよくわからない原因は、皆さんがその問いに答えられないこと、日本人としてこれほどすごい国をつくりあげたということに自信をもっていないこと、そこにあるんです。答えなければならぬんです。か。（塾生「民主主義や、経済成長していかねければならないという思い」）その思いの軸は何なのか。何がその思いをつくったのか。それを答えなければならぬ。日本人も「日本というのはこんな精神がモットーだ」といえるものを理解しておけば、どの世界に行こうとも自分に自信をもつことができるし、外国人も日本のこと

がわかりやすくなるんです。これは極めてむずかしいことですよ。これだけすばらしい社会をつくりあげたにもかかわらず、日本の社会を見ても日本人の精神性はつまみにくいんです。

では、それは何なのか。たとえば、日本には古くから自然信仰がありますね。太陽の神、海の神、山の神、木の神。日本はどちらかという多神教的なんです。天皇制だとか武士道だとか、いろいろなものがあります。根本にあるものは何かといいますと、多神教的なものなんです。さまざまな神がいるということなんです。ひと言でいうとそうでしょうが、そこが本当にわかりにくいんです。なぜかといえ、キリスト教では唯一絶対の神様以外のものは悪魔だと考えています。日本人は悪魔を信じているんだと思うわけです。韓国・中国の儒教からしてみれば、自然信仰というのは未開人のものと考え。儒教というのは人間の先祖だけを拝むからです。「日本人は未開人なのに、どうしてこんなに成長、成功することができたんだろうか」。その精神の深いところをつかめないために、日本人を叩かないといけない、と思うようになるんです。

つまり、韓国は先祖、人間を軸にしてい

ますから、よいか悪いかは別にして、わかりやすい軸があるんですね。それならば、国家としての軸は何か。北朝鮮を見ればよくわかりますね。王様が軸なんです。「金日成（キム・イルソン）王様が作りあげた考え方、価値観が絶対」という価値観になるんです。昔は王様でしたが、最近は大統領ですね。だけれども、大統領も今みんなふわふわとしている。だからそこには軸がないですが、それ以前の軸となるものがあるんです。

それが何かといいますと、歴史認識なんです。これが韓国人の精神性をつくるもののひとつなんです。ですから「歴史認識」というものはひとつしかない」という考えになる。よいか悪いかは別にして、私たちの歴史認識はひとつで、違う価値観をもつた人を許してはおけない。ですから、北朝鮮は金日成（キム・イルソン）の考え方が絶対なんです。唯一絶対である神様と同じものなんです。ですから、それ以外の考え方ももった人たちは全部粛清する。去年の今頃、北朝鮮の今の金正恩（キム・ジョンウン）体制で、側近の張成沢（チャン・ソンテク）が粛清されました。絶対的な一人の考え方に反するものは全部ダメなんです。

これが、韓国の場合には歴史認識、「韓国の歴史認識が絶対正しい」ということになる。しかし、日本人の場合には多神教的ですから、唯一絶対なる神がいらないんですね。ときには太陽の神様も大切だし、ときには水の神様も、木の神様も、山の神様も全部大事だと。これを人間にもあてはめるわけです。

「人間一人ひとりの命が神様です。だから、私の価値観だけが絶対的じゃないんです」と日本人は言うんです。韓国人は、中国人もそうですが、自分の考え方が絶対正しいと言いつづけます。しかし日本人は「あなたの考え方だけじゃない」と言うんです。私の考え方もちよつと入れて、この人の考え方も、あの人の考え方も全部入れるのが日本人です。

だから、日本人が「ひとつの考えが正しい」という国民性になるわけがないですね。一人ひとりが全部神様だと考えられているのが日本人なんです。多神教的な発想なんです。ですから、絶対的なものはありえない。「話し合いをしましょう」となる。話し合いをしているうちに、何か大切なものが生まれてくるというんですね。

誰かの考え方が絶対的だということ、日本人はとても嫌うんですね。韓国人、中



国人はこれがつかめない。儒教的な発想だと、一人の考え方、ひとつの考え方が絶対的ですから、日本人のいう「『和』を大事にしましょう」「いろいろな人の考え方から何か生まれてくる」ということは、韓国人・中国人には絶対できないんです。日本人はあやふやだ、彼らを叩いておかなければいつ暴れだして軍国主義が復活するかわからない、とものすごく不安がりました、「日本人は正しい歴史認識をもて」と言いつづけるんですね。

しかも、日本人は言いたいことを一〇〇%は言いません。五〇%ぐらい言えば、あとの五〇%は相手がわかってくれるだろう。「察する」という文化が日本にはあるんですね。すばらしい文化ですよ。一〇〇%全部言う人はくどい。つらいことも悩みも、五〇%ぐらい言えば、あとはだいたい相手にまかせろ。

日本には「間をおく」という美意識がある。間をおくことで相手の気持ちを察する。間をおいたり察したりする文化は、韓国にも中国にもありません。韓国では言いたいことを一〇〇%言う、それでもだめなら一五〇%言う、それでもだめなら二〇〇%、三〇〇%。同じことを繰り返し繰り返し言っていることがよい、というのが、儒教

的な発想なんですね。

ということ、「日本人はわかっていない。私たちが教えてあげなければならぬ」という気持ちで、韓国人は持っているんですね。教えてあげるのは、韓国ではよいこと、善です。日本人にしてみれば「やかましい。そんなこと教えてもらわなくてもよい」という気持ちになる。

ですからやはり、日本と韓国・中国のあいだには本当に大きな価値観の違いがある、ということを知ってから、付き合いなさいといけません。韓国をおだてて、「話し合いをしましょう」「和を大事にしましょう」といくら言っても、和は生まれないんですね。

韓国人・中国人と日本人が、これだけ距離が近いにもかかわらず、まるで地球の反対側にいるかのような違いがあるということなんです。そのことを前提に付き合いを考えたほうが建設的だと思うんです。私は、「今のこの時代、この時期に、ぜひこの違いを勉強すべきでしょう」「無理して付き合えば付き合うほど悪影響がありますよ」ということを言っているわけなんです。日本の美意識の「間をおく」「察する」を実践するために、何がこんなに違ってしまったのかということ勉強して

いく時期ではないのかな、と私は思っています。

今日はわずかしかお話しできませんでしたが、そのような違いについて、私はひとつひとつ克明に本に書いております。私は、日本人と韓国人はこんなに違うし、日本の考え方は世界で二つとないすばらしい価値観だと気づいたときから、日本が大好きになりました。韓国では、日本を好きでも公の場では言っただけいけないという暗黙のルールがあります。ですから、個人的には日本が好きだけれども、公の立場にたったら日本嫌いということになってしまっています。

私は『「反日韓国」に未来はない』という本（小学館文庫、二〇〇一年）も書いてしまっているんです（会場笑）。反日の韓国はダメだと。そして、『私はいかにして〈日本信徒〉となつたか』という本も書いてしまっている（PHP研究所、一九九九年）。韓国では、この本は読まなくていいといわれています。「呉善花は親日派」というレッテルを貼られているんです。「親日派」ということは、韓国では「売国奴」なんです。日本が好きだということとはなかなか公に言えません。日本はこんなにすごい、私は日本が大好きだ、といったら抹

殺されるんです。私は韓国でいま一番叩かれる対象になってしまっています。

でも私は、日本が大好きだということ、反日をやめて素直に日本の精神、和の心を研究する学者が韓国から出てくるときに韓国の未来があると言いつづけること、これが私の使命だと思っています。そのようなことができる、言論の自由があるこの日本で、この発言ができるということは、どれだけ私にとって幸せなことでしょうか。韓国だったらこの発言はできないですよ。言論の自由がありませんからね。そのことができる立場におかれた私は、すごく運がよいです。そして本日、皆さんの前でこのような話ができたとすることは、私にとっても幸いだったなと、ありがたく思っております。

時間びつたりですね。本日は本当にありがとうございました。(拍手)

■質疑応答

●質問 (東寮四年・キム君)

僕も韓国からの留学生で、四年間日本で勉強しています。先生のお話ですが、歴史問題に関してなど、韓国のほうが頑固で受け入れないというふうにとれました。こう

いった問題は、日本側が「話をしましょう」と言いつづけるしかないのでしょうか。

■回答

今までずっと、日本のほうは「話をしましょう」と言いつづけてきました。共同研究会も何度も行ってきたんですね。韓国の専門家と日本の専門家が集まって、何度も何度も共同で歴史を研究しようとしたんですが、全部ダメになりました。

「話し合いをしましょう」というのが日本人の精神性なんです。でも、韓国人のほうは、「一〇〇%韓国に合わせろ」という考えなんです。他にも、ものすごいギャップがありますからね。どうにもならなかったんです。それで、今のところ「間をおいたほうがよいですね」ということになったんです。

このままいくら話し合っても、日本人と韓国人の価値観の違いを知らない限り、お互い未来はないということ、私は言いたいですね。

●質問 (東寮四年・キム君)

慰安婦の話がありました。語弊があったら申しわけないんですが、韓国のほうがワガママというお話だと思いました。自分も

中国やアメリカのことをなるべく客観的に知りたいと思つて勉強しているんですが、どうしても戦争は被害者と加害者に分かれるわけで、特に被害者側としては感情的になってしまふことが多いです。韓国人としてはどう対処すればよいでしょうか。

■回答

この問題は、政治的な問題が大きいですね。そのときの政治の動きによって、感情がいろいろ変わったりします。私も、真実がどこにあるのかと悩みながら、日韓の歴史はどうなっているのか探ってきました。ところが、日本と韓国は戦争したわけではありません。韓国では、日本統治時代の三十六年間については、苦しめられたことだけを教えています。けれども、実はこの三十六年間、日本は韓国にすごく投資して、ものすごく赤字になっていたんですね。それだけではなくて、この間に韓国はさまざまな経済発展を遂げました。悪いことばかり言われているけれども、これは事実なんです。

これだけは皆さんに知っておいていただきたいと思います。たとえば、農地改革が行われました。二十年、三十年のあいだに、お米の生産量が倍ぐらいに増えました。

お米というのは大きな経済力でしたからね。そこで、人口はどうなったでしょう。よく、虐殺された、略奪されたという教え方がされますね。日本統治時代の一九一〇年に韓国は一三〇〇万人くらいの人口でした。それが終戦直前になると、人口がどれくらいになったと思いますか。(キム君「わかりません」) 想像でいいですから。いま教育で教えられているように、略奪と虐殺があったと考えるとどうなりますか。(キム君「見当もつかないです」) なんと二五〇〇万人なんですね。人口が倍ぐらいに増えているんですよ。

では、学校、教育はどうでしょうか。よく、「教育を奪われた」といわれますね。一九一〇年の日韓併合の前から、日本は韓国に入って学校をつくりはじめます。小学校、国民学校です。初期は四年制でしたが、だんだんと六年制になっていきます。一九一〇年の併合する段階では、国民学校は百校くらいありました。一九四五年の段階で、韓国に小学校はいくつくらいあったと思いますか。じゃあ、他の方。(塾生「二百ぐらい」) 三十年ぐらいのあいだに、二百校ぐらいに増えた。(塾生「二五〇」) 一五〇。

ところがですよ。五九六〇校くらいです。

すると、識字率がとても高くなっていきますね。多くの韓国人が読み書きができるようになりました。日本語を教えたというところだけを強調されますが、日本語も教えました、ハングルも教えました、朝鮮の歴史も教えました、日本の歴史も教えました。日本語を教えたということだけを切り取りますと、いかにも言語抹殺ということになるでしょうが、ハングルも朝鮮の歴史も日本の歴史も教えていたんですね。日本語であれ韓国語であれ、たくさん知識が増えたということなんです。

六千近くの学校を次々つくりあげたということと、人口が増えたということだけを言っても、だいたいわかりますね。他のことは言う時間がありません。日韓関係はそんなことを踏まえて語らなければいけないんですよ。

とにかく、一部分だけを切りとってその部分だけ拡大していきますと、何ごとともそうなるんです。物事は大きな流れの中で、なぜそこで起きたのか、ということを見ていかないと、その全体の流れ、世界の流れはなくなってしまうんです。本質が見えてこなくなるんですね。これはすごく大事なところなんです。

私は、そのような観点から、なぜ日韓併

合せざるをえなかったのか、という背景や、実際どうだったのかということ、世界の大きな流れの中でとらえるようにしてきてんです。日本にはたくさん資料がありますから、来日以来、ものすごく衝撃を受けながら、ずっと勉強してきました。

キムさんも、せっかく日本にいらつやつたんですから、このチャンス逃さないで、イデオロギー的なものや感情的なものは横において、素直に日本をみつめていた方がいいと願っております。

ありがとうございます。(拍手)